

朝寒を父なり子なり二人ゆく歟肩にし麥踏みに行く

杉本眞一

湯氣に曇る窓の硝子をと拭けば街はしと／＼とみぞれ降り居り

岡見正良

海原は青くすみたり大空にちぎれ雲とぶそのはてまでもひろ／＼とはてなくつゞく海原のきはまる所白き雲浮く

須戸源籍

秋日暮れ今日も寒風はげしければ人も寒かる柿も寒かる朝飯のしみじみうまし今日も亦ほがらかにつこめはげまんと思ふ

杉原眞一

五位鷲の空高々と渡り行く菊の香高き夕暮の庭かりたての頭を風に吹かれつゝ家路に急ぐ冬の夜かな

島倉昌一

雪隠の傍にある柿の實の二つ三つの風情ある哉勉強の暇あるごまに兩親のたんせいこの菊の花見る

小山止

ゆく秋の梢高くも裸木は天なる月をつかみかゝれり

高田善之助

秋の空西より出でし飛行機の音たか／＼と東へかすむ

北村喜代美

湯上りの床几にてきく蛙の聲雁の聲とも夜空渡り來

中野修吾

立關に聲する度に出づるなり父の土産の待たるゝ日かな妹は墨すれといへさすみ磨らて玩具の汽車を紙に書きをり

小林隆

この家はありし昔は俳聖の住まひし家と人づてにきく俳聖が紙衣脱ぎすて壺に入れうづめて行きしこの紙衣塚

石田敬三

碎くると見せては又もやよせ來る波の力はそこひ知らずも

豆子清一

縁先に猫のねむれりてる陽かげ今はえさゝす影になりをる朝夕に仰ぎし山よ金剛山離れてすめば夢の如思ふも

小田博

稻の波立たぬばかりに風吹きていづこともなく秋の香のする

北村久太郎

青空に今日はさびしき出船かな汽笛にそれと走る人々

一谷道雄

秋晴るゝ窓べによりてながむれば四方の山波白く見ゆるも霜道に歟をかつぎて急ぎ行く農夫の姿又一つ見ゆ霧こめし田圃に立てばひそかにもせゝらぎの音のきこえ來にけり

原田均

大人より子供の方がよくつれる魚つりを見る一時たのし

小川清孝

弟よ語り明かさん冬の夜をまだ見ぬ國の春を訪ねて

横田不二夫

なつかしの母とま見えしよろこびもたゞ一ときの夢なりしかな

寶意敬造

仰ぎ見る金亀の城の夕映えてねぐらへもさる鳥一つ二つ

枝々をさけて通れや秋の風吹くたび櫻の木の葉散りせば

湯本俊彦

太い筆をおれよと許りににぎりしめ今書初めの弟なるかな

西山子得

夕ぐれの窓なり街を眺むればわくら葉一つ道に散りてありわだつみの海原遠く七色の雲かゞやきて年あけにけり日の入らんとしてくれなるの雲もえたちつわだつみ遠く波躍るなり

大日方弘明

ねずみを追ひ來て捕らんとする猫のかほじつと見て居る日曜の午後

能谷泰一

夕暮れし金亀の城よ何百のからす群れ飛ぶ曇りたる空歸らじの心心に出でて行く將士の顔の微笑み照れる

一年 西田洋次郎

雞頭に勝りて赤きは日の丸と大和魂只二つなり

小田博

雞頭のえらさうな顔に牝雞の首をかしげて近寄りて來る

赤田 恒夫

にはとりのとさかとはかり思はれる其の愛らしき雞頭の花

青木 一男

雞頭の花さしてあるおへやにはお客あるのかよくこえがする

坂村 豊

彦中の校庭に咲く雞頭花一つちらしてもらふお目玉

樋口 清

柿の木の下に咲いてる赤い雞頭一人ぼつちでさびしいだらう

吉居 恒雄

秋空を雞頭獨りさびしいか蝶がひら／＼なぐさめてゐる

小西 繁次

一列に側面縦隊なしてゐる黄色い顔したけいとうの花

中津 孚

雞頭やしばふの中に空仰ぎあたまふら／＼立つてゐるかな

樋口 芳朗

僕たちを残して逝かれた父上の唇に似た雞頭の花

森 東三

雞頭の帽子をとりて叱られてこれやかなはじと逃ぐる彼かな

河崎 敏男

秋の日に赤や黄色とさまざまにさき誇つてゐるきれいな雞頭

坂田 保

三角に赤く咲いたよ美しくむらがり咲いたよ雞頭の花

松田 又一

日輪の光を受けて庭園に咲きほこりたる雞頭の花

寺村 道夫

雞頭が花園の隅に咲く頃はもうすぐ夏休みになるよ

瀧 千秋

ほそいきでかい花つけおもしろいかおじぎしてゐる雞頭の花

古池 敏郎

赤や黄の色様々の雞頭花風に吹かれて皆首ふつた

田中正義

水瓶に日射し明るし梅の花

伊吹山夏鷲のまひる時

朝つゆや登山杖なくころびたり

四年 藤邊 行静

朝顔の種實になりて秋晚し

ふみ分けてふみ分けてゆく秋の山

小森 四朗

春の空かすみて山の遠青し

秋晴れて右手に見ゆる天守閣

河邊 あきら

初夏やわき出で初めし雲の峯

磯の香や夕立雲の動き来る

冬の雨石を叩いて暮るゝかな

堀居 堅次郎

立圃に鉢並べたり菊の棚

稻扱の音續きたりなはて道

内藤 二三夫

名月や話はずみて句はならず

紅葉の浮いてあるなり手水鉢

夏の海帆船追ひゆく小船かな

川森 義夫



俳句

五年 和田 純乗

梅雨荒れて遅刻したりと書く日記

親子四人ほうづきを手に墓参哉

秋立つや庭はざくろの實の一つ

中村 健藏

蚊を叩く音に更けたる夜講かな

君來ばと西瓜かゝへてまつ夜かな

林 義夫

春雨やのび／＼と聞く時の鐘

稻の花民かれの日影かな

大橋 文吉

崖道を轉けて來たり握飲

深縁にベンチしづかに置かれたる

中堀 正男

夢醒めて蝶見る猫の欠伸哉

春風に腰おろしたる堤かな

松籟や淋しくなりしキャンプ村

人目引く不具の乞食よ秋暮るゝ

森 貞三

赤とんぼ落葉を追うて飛びにけり
聲追へまかけ見えぬなり渡り鳥
魚釣りの川面まばゆき秋日かな

植田 半三

川下に網うつ音や秋の風

堤 孝雄

冬枯の木膚や月に風光る
蜘蛛の巣にかゝる木の葉や秋寒し
すみわたる月の木影や虫なきて

湯本 信良

コスモスを地に叩きをる野分かな
山茶花の咲ける垣根を歸省かな

國島 惠祐

長閑さや野に出てて花つむ乙女
朝露に裾はぬれたり茸かり

佐久間 富雄

池の端は雪はや消えぬ庭のうち
讀みあきて出づる庭面の落葉かな

藤谷 賢雄

夕映の刈田や立てる案山子

福原 快稔

風鈴に青き虫這ふ朝かな
かたつむり笹より落ちぬ朝の庭

寺島 傳勇

隣の子一人遊べり水鐵砲

水泳や大暑に慣れし顔ばかり
夕立に叩かれてゐる池の鯉

夏シャツの縮に糊のこわきかな

小川 榮之進

納涼臺空澄みきつて秋近し
ひぐらしや一雨すぎてそぐ風

矢野 秀雄

盆踊り頭ばかりを見て歸る

自轉車や頭で分ける青柳

古城趾の緋織草や葛紅葉

西川 良造

河骨や目高の上る夏の川

村道の暑さや汗の郵便夫

柿の實の熟して落ちる空屋敷

辻々のピラの招きや惠比須講

北村 喜代美

松ぼらのかすみで見ゆる春の雨

今朝の霜刈田の株の薄白う

菅原 道忠

秋晴や家内そろうてきのこがり

松茸のほのかにほふくりやかな

三年 岩崎 清

軒下の金魚の鉢の夕かげり

月光を浴びつゝ聞くや虫の聲

森野 宇平

柳から洩れくる月の光かな

良い水に冷せし美味の甜瓜かな

地下足袋の臭ひ酷暑に煮える足

棕田 弘士

炎天の熱き砂面をなでにけり

炎天や遙かに白し島のかげ

窓越しに見る樹へ蟬の止りけり

北川 脩

眞夏日の暑き芝生や應援隊

秋近し緑の稻の波打てる

ひとしきり又鳴き立つる小蟬かな

へうたんの實りてゆるゝ垣根かな

三年 山川 繁

山川 繁

西山子 得

細川 常雄

七色の雲をうつして春の海
ほし柿の一つのこれり倉の窓

秋晴を雀追ひつゝ遊びけり

蝗とぶたんばの道や秋晴るゝ

秋晴や道一ばいに糶を干す

秋高ししづ／＼上る日章旗

榎木 賢三

二年 大谷 卯一郎

神さびし多賀の宮居や今朝の霜

大根がすらりとならぶ師走月

飛行機の湧きくる空や秋高し

颱風のやつと果てたる日和かな

日曜につゞく旗日やハイキング

月の戸に稻かり鎌のかゝりけり

落椿岩のくぼみに重なりぬ

鐵棒に鳶とまり居り休校日

二年 西村 政雄

岩根 義一

三年 岩崎 清

屋根瓦の日に光るなり霜の朝

秋朝急ぐ農夫や霧の中

秋晴や古城に近くの小ケーション

軒端をせましとばかり吊し柿

夕闇や取りのこされし柿三つ

すゝき原薄月寒くくれてゆく

菊の香や運動場の晴れし朝

秋風の一本松を通りゆく

秋晴れや溝にも映る深き空

釣竿の先を遮るすゝきかな

さはがしく馬車通りけり暮の街

風寒き河に列びぬ大根舟

私風や月の落ちてゆく村の壁

山中彌三

大道清與門

藤川俊彦

富永信雄

満島俊次

澤為次郎

佃精一

黒田寛道

辻千秋

はら／＼と落葉音して秋暮るゝ

秋晴れて鶯の羽ばたき大いなり

日のあたる庭一面に落葉かな

もみほしや祖母も出て来る秋日和

刈田すみあほむく秋の空の色

渡り鳥羽音たかくすぎにけり

秋風や時鐘にくるゝ城の夕

店先にならべ出されしスキーかな

柿の木の風に乾したる大根かな

あの風が冬つれて来るかこの寒さ

秋風の我が家ののきをとりけり

落葉かきにぎはふ山のひよりかな

吉川公久

浅島浩三

小倉源造

宮内勝三

辰己眞三

寶意敬造

柴田善守

岡庭秀

木内敏雄

樋口善八

原田均

横田不二夫

一谷道雄

期川に大根洗ふ女かな

木枯や古城に高き日章旗

さくら木のはの落ち初めて秋近し

城山の空高き鶯や今日も晴

夕暮れて蘆にかくるゝ田舟かな

うら枯れのまこもに集ふ緋鯉かな



郷土セクション

はしがき

彦根に住んでゐて彦根を知らぬ——では、はじまらない。「燈臺もと暗」の非難は勿論受けねばならぬ。が、それよりもわが彦根中學と彦根の地については、歴史から見ても所在から見ても因縁まことに淺からぬものがある。凡そ人間の生活は、存在は、歴史的にも風土的にも大なる規正をうけてゐる。彦根の地に學園を營み、朝に夕に彦根城を仰いで暮してゐる我々彦根中學生が彦根を知るこゝろは、郷土教育の理論を俟つまでもなく、自己の存在を短り、自らの姿を反省する意味となる、即ち人間的自覺の一過程、生活的發展への一酵素——かう考へて、わが雜誌部委員合作、急場の常識を傾けて郷土セクションこゝろ一欄を設け彦根紹介の筆を執ることにした。

概 説

琵琶湖の東、芹川の下流、湖東平野に包まれて面積三・四五二方軒、地層は沖積層、人口二萬三千十區九十二字、交通の要地等々そんな四角張つたこゝろはやめる。往昔人口六萬を數へたといふ城下町城山に天主は輝く四時の山水美、氣温乾濕適良にして五風十雨のよい所、井伊家三百年の歴史は眠る懐しの郷。

彦根の名稱は何から——と尋ねると、三百年こゝろか、悠久、太古に遡る由緒。昔昔その昔、天照大御神と建速須佐之男神とのうけひ（神誓遊）ばされた時生りませる神の御子活津彦根之命の鎮座の地によつて稱へられる。年根は日子根、日の神の御子の靈域であつたと言ひ傳へられてゐる。國民的意義の深く且遠い土地柄である。

井伊家の居城となり、藩政を施かれたのは徳川の初期でそれ以來、廢藩まで三百年、一段の股賑を加へ、三十五萬石の城下として城下に鳴つたものである。その頃の人口は現在の二倍も三倍もあつたらしい。

従つて彦根の住民は在來の彦根土著の純近江人と藩主井伊氏祖先の遠州井伊谷の臣である三河武士舊武田氏の甲州武士、近世の都市商盛を望んで日野町方面から流れ込んで來た一部近江商人系こゝろ、か

う混成した分子を一丸としたもので士魂商才相關同抱し得た現在の彦根人とある。カクテル式構成とも言ふべきか。

勿論、中近古に於ては信仰の地として、幾多の名利があり、皇室との關係も篤く、近江の靈場として有名であつたらしい。今の池須橋につゞく巡禮街道の名も、往昔靈場を訪ふ巡禮子のため設けられたが故であるといふ。

近世では朝鮮人使節が彦根に滞留する例となり、これが接伴にとめたもので、朝鮮人街道の特設となり、湖岸の濱街道（長濱に通ずる）と共に三者何れも古來よりの有名な道路であつた。往昔の仲仙道は鳥居本の方に外れてはゐるが、彦根が交通の要津であつた點にかはりはない。

舊彦根城の地圖を按じても大口は京橋を経て平田繩手に入つて朝和鮮人街道、一方巡禮街道と同じ、佐和山口は鳥居本街道となつて中仙道に運り、御船口は湖上の舟便で大津京都との連絡をとつてゐる。

廢藩置縣は彦根にとつては相當の打撃であつたらしい。四民四散經濟不如意で、中樞を奪はれて人口も一撃に激減、町政振はず元氣は大津地方に奪はれた形であつた。

が、何と云つても彦根は湖東の中心都市である。お城は依然として光つてゐる。彦根人氣質は漸進的に頽勢を盛り返へした。政治都市としての威力は喪つたが、産業都市として、學都として斷然大津

長濱をリードして來た。

今日の彦根の本質を知るものは、當然に明日の彦根の表現を想望せないではゐられまい。

縣の中心地——彦根

縣廳を彦根へ、といふ説も出た。聯隊を彦根へといふ説もあつた。地位、しても實質としても彦根が滋賀縣の中心であるといふ證左の言はせたわざである。縣廳も聯隊も今日の處實現はされないが、彦根は着々と膨れつゝある。縣下の産業都市としての現勢を數へてみるならば彦根の外廓を繞つて鐘ヶ淵紡績、近江絹織、江華綿業、近江帆布、昭和セメント、煙草專賣局、宇治電近江支社、彦根瓦斯湖東汽船、近江鐵道等十指に餘る會社が所在してゐる。商都としての彦根の地は名古屋と京阪との中間にあつて雙方商權の中間にあり、自然競争地域として物價の安直を誇り得る地の利を占め、水産物とても日本海もの東海もの瀬戸内もの、幅濶するところ、所在及近郷の購買力と相俟つて、彦根は暮しよいとところとの定評を恣にしてゐる。更に土地柄、湖東平野よりの農林産、湖畔よりの水産物に加へて在來の各種製造工産品を加へて商盛はまさに縣内第一といつてよゝ。

測候所がある。圖書館がある。水産試験場がある。以前には米穀取引所があつた。がそれにもまして語るべきものは滋賀縣の學都としての彦根である。「彦根の地、教育最も盛なり」「教育の盛んな

ること管内その右に出づる所なし』等明治十年頃の滋賀縣地理書や日本教育資料や、庶民教育史などにもあつて、教育と彦根は古來のことながら、現在にして滋賀縣唯一の専門學校國立彦根高商をはじめ、縣立中學、縣立商業、縣立工業、縣立高女、縣立盲學校、小學校、幼稚園と各層各種完備網羅してゐる。殊にわが彦根中學の如きはその源を藩校弘道館に發して明治に入り滋賀縣最初の中學、所謂縣下の中たる歴史を誇としてゐる。「湖の眺めは彦根が一よ」の俚諺もあるが、この山紫水明の氣よく山水美に加へて、人物史上の光彩に就いても亦滋賀縣一たらだるを得んではないか。

亦通の點に於ても、長曾根波止塲は太古汽船、彦根港灣は湖東汽船、東海道線彦根驛、近江鐵道市の内外をつなぐ各種バスまた一地方の中心たるを失はぬ。松原地帯に飛行場設置の話題さへある。都市計劃も漸次進められ、大彦根の建設も遠い將來ではあるまい。

彦根小史

彦根の歴史は極めて古い。約三千年前天津彦根命の彦根山に降格された時からと見てよい。その子孫に大瀧神社に傳はる鳥籠山犬咬みの傳説によつて犬上郡の名をとどめた犬上縣主がゐる。日本武尊にも縁がある。彦根城の西の丸迎春館の西區に老松のあるあたりを尊嶽と謂はれてゐるのは尊が一時お住みになつたかららしい。

中古に入つて藤原鎌足の孫房前が亡父不比等の菩提を弔ふ意味で彦根山に一寺を建立した。彦根寺であり、彦根寺が當時西寺東寺と別れてゐたらしいが、東寺は衰へて西寺のみとなつた。有名な金胎城の觀音様はこの寺に安置されたわけだ。以來彦根は佛縁を加へて靈地として全國に喧傳された。諸國から巡禮はあつまる。寛治三年には白河法皇が郷相雲客を隨へての御參拜。その以後信仰の地として彦根は彦根山を中心として發展して來て室町時代に及んだ。

戰國時代になる。石田三成が佐和城主となるに、今の彦根郊外の大洞のあたりが城下町となり松原内湖に壯大な百間橋が架るといふ威勢、村は之と近く對蹠的地位に孤立した。

關ヶ原の合戦後井伊家の移封によつて、彦根城築造となると、今度は彦根山の諸寺立退きとなり、山の一部も崩された。二十年の歳月に彦根寺門甲寺等々の信仰の靈寺はいつしか武畧の手に入つて城下の彦根城として臺は光る、臺はかゞやく一躍して、町割が定められ、原野料地がまたゞく間に堂々たる市街を出状せしめた。

彦根城の普請は家康も賛成し、奉行を遣はし、近隣の諸大名にも夫彼を命じ、大がりの念の入つた御手傳普請であつた。長濱城、大津城、佐和城、安土城から移した建築諸材料でもの／＼しく構築されたわけだ。城内の樹木も一つとして無駄はなく竹は刀の目釘用、檜は槍柄、梓は何、松は何、楓は何とすべて軍用應急の樹として諸國から移植したといふ。中仙道隨一の名城としての威容を整へて

躍進した。數度の加増で寛永十五年には三十五萬石、大々な都市計劃、社寺の建築。元祿八年の大洞
辨天録から推算すると、五十三町の平民一萬五千五百人他に三十三寺の僧籍七百五十人、藩臣二萬五六
千人、江戸詰武士家老以下五千人、總計五萬人に及ぶ人口、これを明治十六年の全人口二萬、今次の國勢
調査の二萬五千人に比べると轉今昔の感がある。

文久二年櫻田門外の變で藩政はゴロリと變つた。十萬石減封の憂目さへみて、維新の渦中に入り、
皇室の御ため種々盡すところがたつたが振はず、明治四年七月の廢藩置縣で大旋回となつた。城下街
彦根の最大災禍である。

其の後彦根城は一時陸軍省用地となり、更に御料地となり三轉して井伊家に拂下げられ、今日彦根
町に管理を托されてゐる。

維新後の彦根の衰微は實にひきかつた。將に士族や町民にとつての財政の弱り目は極端だつた。而
し再び盛り築き上げられ今日では一段明るい明日を待望する機運に復した。

彦根城

彦根の城はその輪廓の美しさに於て、その歴史的價値に於て、その築城法の模範に於て、見る人の
想ひに於て、彦根を語り、彦根を飾る代表建造物として、げに、繪であり、詩であり、夢であり、力

である。

鬱々として茂る木々。仄に見ゆる櫓の白壁、さては一段と高く光る城主の臺、景觀としてみる彦根
一帯の首座金亀城、春によく、夏によく、月によく、雪によし、神秘の姿、歴史の影、これあつて
彦根を語る勇氣が一段と加はる。

慶長五年九月、赤鬼の驍名を以て謳はれた井伊直政公が關ヶ原の戦功を以て舊石田三成の居城佐和
山の城主となり、深く思ふところあつて彦根城築城を急ぎ、その遺志によつて二十年の歳月を費し、
元和八年に完成したといふ。その金亀城と名付くる所以は、往昔この地に彦根寺あり黄金の亀に乗り
たる一寸八分の觀世音を安置したその由緒によるといふ。

現存の主なるものは天主閣、多聞櫓、西の丸、天平櫓、本丸樓門、廊下橋、鐘の丸、等である。周
回一里、一〇〇米の小丘ながら古松、密林、外郭、起伏、一帯の濠の水太古の如くしづかに、登臨し
て眸に入る。環堵の山野、太湖の藍碧、何といつても自然美人工美の雄大なパノラマである。

彦根の驛前通りを一直線にお城を目掛けて歩く。常盤橋にかゝる、もう外濠である。濠を渡ると今
は尾末公園となつて大老井伊直弼公の銅像が儼然と聳えてゐる。個性のかつたはげしいながらもなつ
かしい威儀堂々たる御姿、幕末の乾坤を一身に引いて皇國の大事の前に彦根一藩を犠牲にしても而

も彦根の精氣を今日に保たしめた偉人、官祭招魂神社を前にして、昔なつかしいいろはの松の太木が中濠の水とすれ／＼に枝を垂れてならんでゐる。このあたり番所詰所のあつたところだらう。埋木庵は右手の方ださうだ。ここから仲間や若黨が歩いて来るやうな。まづ馬場先いふところだと合點しつゝ、城廓に入る。石垣の斜面や、櫓や白壁やがすぐ目の前に仰がれる内濠に沿うて右に曲る彦根公會堂が白々と建つて芝生で子供が遊んでゐる右に折れ左に折れる。皆昔の屋敷跡だ。玄宮園ともいひ八景亭ともいふ井伊家の御下屋敷、數寄を凝らした庭の木立のすが／＼しさ。美しき御樂山も椶御殿(樂々園)も昔のまゝに眺められるうれしさ。樂々園の前から右手の濠は眞菰や葦や蓮や雜草になつて水郷らしい情緒は御船倉のあつた松原の方へつゞく。道を返へして佐和山口から上る。搦手といふところ、右のひろつばい空地が今の公衆運動場、昔は立派な御城中總締の建物のあつたあこだといふ。茶店がある。石の坂にかゝる兩側から樹々が覆ひ被さる薄暗い道だ。昔の中學生はこゝらを出發として草木もねむる丑滿時を頂上往復の試験會といふやつをやらかしたのだらう。大木の濕つばい間から昔の武士の精魂や處刑者の怨靈があらはれぬでもない。二町ほゞ登つたところで京橋口の大手門から来る道とブツツからそこから一つになつて、一段上が廊下橋だ、渡りきると『秤櫓が兩方にひろがる。樓門の柱の右上に掲示して由緒が書いてある。長濱城から移す全部樟材だか何さか。北西行するこやがて本丸の樓門前、昔は關西觀音の靈場その舊樓門をそのまゝださうな、柱に残る釘孔

は廻國巡福の札懸の釘孔さか、一名太鼓壇ともいふ。いよ／＼本丸だ。天守閣は東西七間半南北六間半、石垣の高さ二間半、石垣から天守閣の棟まで九間、大津城の京極高次の天主閣だつたこいふ。こゝの眺望がすでに絶佳だ。佐和山の脊に伊吹山内湖をへだてゝ磯崎がみえる。千々の松原がつゞく竹生島を遠景にして賤ヶ岳もけさやか。目をおとすると大洞あたり斜面の森に隠見する辨財天や清涼寺や南壽のやうな美しい景趣、これを天守に上つて閣上から俯瞰しようなら東西南北一帯の山河翠巒碧水、その光彩その幽趣何をか言はんやである。

本丸は天主を繞つてひろい空地だ礎石點々と苔むして昔を思ふ。西に新しき世の御便殿があり。多聞櫓の角の石垣を下りると西の丸である。道は御船戸口へ續く鬱蒼たる杜だ。松原へぬける地下道もあつたといふ。ともすれば道に迷ひさうだ。城内の一木一草すべて籠城の用意を周到に實利的に植えられてゐる。今は夥だしい鴉と鳶とのねぐらだ。キキ／＼と異様な叫びや羽音に驚かされる。追手の方へと城山の裾を縫ふて練馬の道場だといふ叢中を長々急いだ。見張番所へ出てほつとした。天下の名城彦根、近世城郭は武士の氣魄技能を語る遺物なんて思ひながら、大手橋を渡つてしまつて裁判所前に出た。諸士屋敷跡はあるひは空地あるひは利用、ふりかへると天主閣の頂上が雲間から洩れた秋の陽に映えて卵色に照り輝いてゐる。

信仰の地彦根

彦根の地が信仰の地であるといふことは、彦根の地名の由來する神代からのことであるが、中世は彦根寺門甲寺等により、近世は藩主の特別な篤信により、現在に於ける夥だしい社寺の存在となつて示され、特産の彦根佛壇、佛具等によつて語られてゐる。

殊に彦根築城當時、彦根城所在の寺院の移轉乃至廢立の問題に對し當時の信者がその尊信の餘り如何に熱烈に公儀と相對立したかといふことは、當時之により六人三かの犠牲者を出した事傳へられる一事によつても知られる。完教は人生の慰安であり救ひであるばかりではない。心の生活である。彦根人の敬神崇佛はまた一面彦根人の人情の美徳至醇を表現した傳統精神である。

とに角、彦根にはその面積の割に比して社寺が多い。特に佛閣の數が多く宗派も各派に別れてゐる珍らしい城下町である。井伊公藩政によつて宗教熱は更に一段と向上したものと見られる。今その主なる神社佛閣を數へてみる。

千代神社 縣社。里根山麓に在る。彦根口より三町。多賀の末社である。彦根有數の神社で天鈿女命を祭る。當社も三河原町に在り。寛永十年癸酉年に今の地に移した。社表一間五尺五寸、裏行一間六尺四寸、流造りで拜殿は桁行二間、梁二間、此の社の上の山は澤山城域に續く。

春は櫻樹で満ち美しいが、今は昭和セメント會社が附近に出來て、山も屋根も白くなつて居る。

大洞辨財天

元祿九年子の年、彦根城主井伊氏が建立した。此處に石の塔が一基ある。西國三十三ヶ所、四國、阪東、秩父三十三ヶ所、其他靈地の土を此の塔の下に埋納し、此石塔を巡歴すれば以上の靈地へ巡禮した事になると言ふ。内湖のすぐ近くの山上に在り、松原、琵琶湖、竹生島、多景島、磯山、米原、彦根城等を一望し得、彦根の名所とも言ふべき景勝の地である。東海道線が足下を通り山門を通じて汽車が見えるのも面白い。附近に清涼寺井、伊神社、がある。

天神社

社彦根石ヶ崎町にある。世間で天満天神を祭ると言ふのは誤りである。祭神は活津彦根命である。金徳の神であつて金亀城に降臨になつたので山を金亀山と言ひ、土地を彦根と言ふ。初め彦根城第三の丸の所に鎮座しますと言ふ。澤山の城を廢し金亀山に城を築くに及んで現在の地に移し奉つたのである。

北野寺

石ヶ崎町に在り。天神社と同じ所に在る。眞言宗、天神の別當と言ふ祈願所である。近江願禮第十四番の札所である。觀音堂がある。初金亀城の頂上に在つた。これを彦根城の觀音と言ふ。金亀山に城を築いたので此所に移し奉つた。慶長十一年の事である。金亀城の救額は、後二條天皇の御宸筆である。昔は西國三十三ヶ所の願禮第十八番であつた。現在願禮街道と言ふ所があるのはこゝによるのである。夫木集に『近江國彦根と言ふ所に觀音の驗所まで、人々いみじう参り

しに、右辨通役に誘はれて参り侍りて、かへりて辨の乳母にいひ遣りける經信「彦根城治ねきかとも聞しかき、八重の雲井に惑ひぬる哉」辨の乳母を照す、彦根の山の朝日には心もはれてしかぞかへりし」とある。

宗安寺

元河原町に在り。淨土宗。鎮西派洛東百萬遍の末寺である。塔頭が四ヶ寺有る行心菴慶昌菴、仙壽菴、運光菴と言ふ。當寺の開山は成譽典應上人。開基は東梅院臺譽崇玉大師である。崇玉大師とは松平周防守の娘であつて井伊直政の妻である。此寺は初め上州に有つて安國寺と號して居た。慶長五年、庚子の年、井伊氏が彦根に封ぜられた時に此寺も隨從して移つて來たのである。關ヶ原の戰の時に安國寺と言ふ賊が居たので、宗安寺と改號した。宗安の二字は崇玉大師の父母の法名を摘み取つて名づけたと言ふ。崇玉大師の父松平周防守夏樂院無月宗九居士。同じく母の宗清蓮院心譽安大師と言ふ。

清涼寺

澤山の麓に在り。城主井伊氏の菩提所である。祥壽山清寺と號す。開山上州叢林寺十五代の愚明正祭大和尚。開基は井伊直政である。慶長七年壬寅二月朔日に直政法名を祥壽院清涼泰安居士と言ふ。それで山號を祥壽。寺號を清涼と號したと言ふ。

龍譚寺

と同じ所に在り。禪宗、妙心寺、派寺記に「弘徳山龍譚寺初上州井谷に在り。井伊備中守共保の爲の信濃守直盛の開基也。直盛四代伊掃頭直孝、封を此地に受け、寺も亦此地に來る。

天和三年巳の年吳和尚開山たり」とある。

宗徳寺

清涼寺の隣地である。

明性寺

彦根職人町に在り。一向宗、西本願寺派。

愛後神社

澤山に在り。石田三成勤請すと言ふ。

長光寺

彦根河原町に在り。眞言宗、又藥師堂もある。

願通寺

同町寺町に在り。一向宗、東願本寺の末派。

養春院

同通町に在り。曹洞派禪宗、萬年山長松院と號す。

妙源寺

彦根安清町に在り。法華宗、京妙顯寺の末寺である。始澤山の古城法華丸にあつた。

中頃藪の下へ移り、百石町に移るまた今の土地に移つた。

寶珠院

彦根町安養寺町に有り。眞言宗。

長純寺

同所字彦根町に在り。曹洞派、禪宗、初上州箕輪にあつたが後に此所へ移つた。

成就院

長純寺と同じ所に在り。眞言宗。

大雲寺

彦根町安清に在り。曹洞宗禪宗、始め上州高崎に在り彦根城主が彦根に封ぜられたの

で移った。

蓮華寺

彦根傳馬町に在り。法華宗。

立泉寺

蓮華寺と同じ所に在り。一向宗、西本願寺派。

其の他天寧寺、仙琳寺、長松院、來迎寺、大信寺、江國寺、圓常寺、千手院、福昌院、蓮乘寺、法縁寺など各所に點在してゐる。神社には官祭招魂社佐和山神社井伊神社が數へられる。

彦根ごころぐ

彦根八十八町といふ。上片原下片原金龍尾末連著なご一々町名を數へるのも煩に堪へない。中には古代の名と現代の名と二つ持つてゐる町も多い。そしてその町名が各々その城下町時代の由緒を語つてゐるのだから面白い。魚屋町には魚屋が住んでゐたのらしい。試みにこの町の大きな家表を見てみると井戸がある。勘定人町にはもと勘定奉行が住んでゐたのだし、職人町には職人が居たのだらう。四十九町には四十九院の寺が並んでゐたのだし、番場町には馬場があり旗手町には旗持ちが居て、紺屋町には染物屋があつて、牢屋町には牢屋があり、鍛冶町、桶屋町、大工町、油屋町、小道具鷹匠、

餌差、瓦焼、外船、内船、柳町、番衆とすべて名詮自稱の歴史的な名稱と思はれる。

京町は京都へ、澤町は佐和山へ、江戸町へ江戸への意味か伊賀町には伊賀衆がゐたのだらうか。今の芹橋一丁目から十五丁目までを組といふ、足輕の組屋敷の名残である。

橋本橋向は芹橋を中心として別れ、河原町は芹川（善利川）に沿うての故か、大標町には大標があつて、土橋には土橋があつたものか、安養寺町の觀音堂筋も寺社の所在からか。

松原を千々の松原といふのはその名の如く松の群立並木からか、之を畧して千松といひ、井伊家別業御濱御殿を千松を千松館といひ、所在の小學校を千松小學といふ。尾末公園の濠に望むいろはの松は、昔はいろは四十八松といつて土佐から移植したもので、土佐松は地上へ出ない特長があり、通行の妨げにならぬための用意であつたといふ。

彦根に社寺の多いのは、何れもいざ鎌倉といふ時に防衛軍の陣地となる用意もあつたといふ。

芹川は上流が大堀川、昔は善利川といひ更に古歌では不知也川といつた。

多景島は靈夢山見塔寺のあるところ、篠が繁茂してゐるので竹島といつたもの。

磯山は磯野丹波守の城址、山上の社の祭神は日本武尊だと云ひ傳へてゐる。

近世以前に屬するが里根、長會根あたりは當時の彦根より、すつと盛んだつたといふ。里根、長會根、彦根と、皆地名の尾に根がつくのはさうした由來やら。

彦根を歌つた詩二、三

彦根

頼山陽

雄藩形勢控湖關

有客觀光一往還

積水橫包幾內地

浮雲斜指越前山

四疆魚稻豐饒處

百雉城樓縹緲間

難獲鄭矣兼戰績

渠魁廢址不遠顏

彦

梁星巖

好似勾吳山水國

山成保障水成圍

蟠聯遠勢控三越

浩蕩餘波及五畿

邑有善歌知政績

野無惡草見風威

舊封二百年屏翰

虎豹依然護九關

彦根城

菅茶山

暮帆遙映女牆飛

大洞山頭雲未歸

眞箇江城如畫裡

臨風誰憶謝玄暉

○

井伊家のこと。

井伊家が藤原の姓を稱するのは、井伊家の率が藤原冬嗣十一代の孫共資から起る故。その井伊家と稱するのは共資の養子共保は、遠江國井谷八幡宮の御手洗の井戸の中から正年元日午の刻に同社の禰宜さんに發見されたといふ。その六代の孫俊直が爾來井氏と言つたのをその韻をとつて井伊氏に改めたのだといふ。

井伊家が家紋として橘を以てするのはその井戸のそばに橘の樹があつた因縁で之を定紋としたとかその後井伊家は遠江より上州安中に移り、更に彦根に移る、直政は共保十五代の孫に當る。

彦根の四季

淺春、芹川に水温みて湖心遠白く、梅信漸く至る。近年までは玄宮園に小澤模翠の盆梅で客を呼んだ。今やその日本一盆梅は多賀の里に移されて行路の人の袖を引いてゐるさか、彦根の春は永い閉藏の冬の鬱居を徹して一時に來る。丸の内はお濠端の柳の芽吹くところ、芹川堤に若草の青みつた頃、

遠山に雪は残りて風なほ寒くとも、野は霞む、彼岸櫻はつゝとして人足また滋しといふところからはじまる。

四月に入ると櫻、々だ。花、花花だ。公會堂裏にボンボリが入つて、赤前垂にジャズの音を蓄音器は春でる。城山の櫻、尾末公園さては芹川堤、誘はれて出る人波にほの温い季節が伴奏する。宇會川敏満寺、豊公園ミ花見の客の浮れ足は動く、お多賀祭は四月の二十二日、そのあたりから季は愈々初夏に入る。

新緑清和、湖のながめは一般とまさつて若葉は何といつても城山である。淡き濃き青葉の目さむるとき鮮緑に驕りの色の豊かさほゞに祭の季節、街のにぎはひ、湖東汽船の出船の汽笛、ボート、ボート、ボートレースに賑ふ港灣の一日。近郊農事々繁く、早苗田に蛙の聲、井伊の英主や三成や長秀やの古英雄が昔の感懐を青一色に包んで追憶は美しい夢と起伏の山の緑太陽の光、湖の銀、麥朮や菜圃やいつしか習々たる青田の風を城南の天地に見る。

夏は水、長曾根のあたり多景島の浮彫に鷗はとぶ帆船はつゞく、比良の紫、竹生の模糊、千々の松原長汀曲浦、漣波の寄るところ平和なる湖國の恵みは松原の水泳場に躍る感激位置がよい環境がよい水がよい。無邪氣がよい純粹がよい、理屈をとびこえて水にとま込む幸福感、力強い夏の炎威も慈光とばかり、琵琶湖祭、燈籠流し、花火大會と相次ぐ興趣は書きぬ。彦根詩の町、水の國。

新涼郊墟に入つて清澄の彦根を圍む新秋の山肌、天際を劃る伊吹靈山の尊畏、菊紅葉茸狩各校運動會、城山の紫、遠山の薄紅葉、秋秀麗にして彦根山水美絶點、空に麗秋を讀へて鳶飛び且舞ひ且歌ひ地に菊花の薫高く色豪華なり、月清き金龜城頭、樹影、山色、露風、清光一望再望、想起百態、爽快は全身に泌み渡る。

眞孤の沼上を湖心に向けて五倍嶺が渡る。

伊吹の嶺に雪が下りると、やがて刈田の上に霜が下りる。十二月に入るともう雪だ。この間に彦根商都の年中行事惠須講賣出し、チンドン屋やピラヤ人波や街の火の海や、惠比須講が濟むと、街の宵は時雨の一さきスキーが防寒具が店頭を飾る。雪の彦根は十二月一月二月と二尺時に三尺四尺の積雪は珍らしくない。雪國に近い情況も景趣も自らに味到される。

近く多賀スキー場、伊吹のスロープ若者も大供もスキー姿に身を固めて出かける、彦根驛頭の賑ひそれよりも彦根の地の雪景色だ。城山の雪、大洞わたりの雪、御濠の雪、玄宮園の雪、行くさして佳ならざるなし、秀麗が絶美か白皚々として浮世の汚濁を一掃して何といふ魅力だ。尾末公園の老松のたわ／＼なる雪、城山の木立を包む雪、内湖をへて連亘の山雲を彩る雪、社寺の隠見、寢鳥の羽搏き山影も平地も湖畔も松原も街並も武家屋敷も、平和か睡眠か靜かに緩やかにながれる銀の起伏、柔かな感情、夢幻のリズム。

花に青葉に紅葉に菊に、彦根よろしといふ中にも彦根の四季は雪の眺めに雪の日に生活情緒に如くものはなからう。雪中彦根十景なき選びたいと思ふ位。

大老井伊直弼

日本は飛躍した。帝國の商工業は世界を舞にし躍進又躍進する。世界の日本ではなく、日本の世界だ。日本の一舉手一投足は、外交にまれ軍事にまれ、産業貿易にまれ、直に世界各國民の視聽を脅かす。何さいふ強い國力の伸展だ。強い心臓だ。激しい推進力だ。産業日本は今や世界を席卷する。

この時私は井伊直弼を思ふ。適及すること七十年、わが郷土にこの英雄出てて剛毅果斷、一身を擲つて開國に殉じ、以て現實日本のかくあるべき臍の緒を切斷したのだ。井伊直弼なかつせば、新日本の躍進を今日に果してよく眺め得るであらうか。見機英斷、世論の唧嚙を彈壓し、眞實皇國のあるべき明日を掴んで世界進發の纜を切つたのである。

非凡と勇斷の大英雄、幕末の大政治家、この偉大を生んだのが、この土地だ。育てたのがこの土地だ。感歎讚仰感謝の念は同郷の故のみを以てではない。

思ふに彼直弼は自己の人物をすべて修養に依つて築き上げた努力家である。幸か不幸か彼は藩主直中の十四男坊として生れたので最早出世は不可能だらうと己の屋敷を埋木の舎と名つけて埋木式な生

活をした譯だが彼はその幼名鐵之介の名に恥ぢずその生活振は世の消極的な隱遁者流のそれではなかつた。あくまでも銅鐵の意志を以て惠まれざる埋木のコンデションから切り脱げんとしたのが彼の十數年間を終始したこの埋木の舎生活であつた『天は自ら助くる者を助く』宜なる哉、時は來れりて苦心慘膽直弼の涙ぐましまての努力は終に神明に通じ彼は天下晴れて、埋木の舎をあとに見て第十四代彦根藩主井伊直弼と昇格したのであつた。生來の聰明なる彼にして且十數年間の精神を加へたとならばそも幾何の總和を生ずるものであらうか、此れ乃ち彼をして青史の上に一大活躍をなさしめたるに至つた原動力である。

幕府の威信全く地に墜ち天下の輿論囂々たる時彼は譜代三十五萬石の藩主として要職大老に就きこの難局に一身を以て臨んだのだがもよより彼としては非常な苦戦であつた。彼は人物力量何れも申分なき大政治家ではあつたが不幸、彼の活躍した時代は彼の演技の巧妙に比して餘りにも惠まれざる臺であつた。

聰明なる彼の頭腦に一度開港の急務が閃ければ彼は斷乎として之を決行した。一つは彼が生來の天性であり一つは十數年間精進した彼が禪の力でもあらうか。滔滔として流れる攘夷の輿論に對抗して赤手もてこれを支した彼。偉大なる輿論の力は唯一個の荷雄直弼の力と衝突したのは止むを得ない。而もその衝動は安政の大獄となりやがては櫻田門外まで響いて行つた。

安政の大獄によつて直弼は眞正面から非難の攻撃に遭つた言ふまでもなく犠牲となつた志士に對しては同情の念禁ずる能はざるも、一方直弼にとつても當然受くべき非難のそれを越せば暗殺要撃も受けなければならぬ自覺しつゝ國家の爲に決行したその心境には悲壯なものがあり同情すべき点が多分にある。直弼も立派な人格者だ唯無暗に西洋史上に現れるやうな流血騒を演じたのではない。むしろ反面かやうな大獄を思ひ切つてまでも自分の主張を通さんとした彼直弼がよく自分の執る政策に對して信念を持つて居たかをうかがふべきである。偏へに信念の力であり、久しき修爲から生れた睿智からである。

假條約に調仰した彼は當時傍若無人の振舞のやうに思はれた。然し直弼の膽玉は羅針盤のやうに如何なる動搖に對しても平靜そのものであつて常に針の向ふ方へ進んで行つた。若し直弼が唯輿論に逆行するを恐れて輿論に流されて居たならば彼は非難も受けず暗殺もされずに済んだであらうが彼が眞に國を思ふの士なるが故に自己を没却して國事に奔走したのだ。又彼の調印した條約は或は國辱的なものであつたかもしれない。然し當時の我國の狀勢としては已むを得なかつたであらう。直弼をしてこれが責任を問ふ位はらむしる當時の一般國民の文化程度を非難する方が至常かもしれない。否それよりも僅か半世紀の間にかくも驚異的進歩をとげた我國の國運を喜ぶ心の裏にかやうな維新の經路を察し、生きたる功績終に今日日本の世界としての日本の臣民として生き得られ且生きつゝある我々

の身の上の幸福を先以て井伊直弼公に感謝しなくてはならない。

彼の活躍舞臺は終に櫻田門外で幕となる。彼として未だ活躍の舞臺がほしかつたかもしれない。或は然しせめてもの自分の取つた處置が奏効するまで居たかつたかもしれない。とにかく彼の生涯が苦戰荆棘の中を突進んで行かざるを得なかつた云ふ事は同情せざるを得ないが一步退いて何故に苦悶したかを考へたい。苦戰の中の前進彼の行爲の殆んど全てには必ず非難が伴つた。「豫言者は故郷に尊はれず」「動があれば反動がある」云ふ而して彼は正しくその通りであつた。彼の行爲は全て優秀なものである。それにも抱はらず舉世の非難を浴びた。彼は常に敵と對して居たのだ。「敵を持つと出世が出来ない」と出世俗には言ふ。然りと云ひたい彼直弼はこの法則を破つてしまつたのだ。これがために彼が之を破る時には無理が起り、この無理が非難となつて彼を取巻いたのだが然し、思つても見よこの破る力は實に彼の天才的な力である——この力は彼の天性と修養との總和による忍苦であり英斷である。彼は一生を通じて非常に苦心をしてゐる。然し全ての苦心を征服してゐる。困難と衝突してこれに降参したら人間の價値はもう無い。衝突の反動を利用して更に二倍にも三倍にも前進するのが英雄のみ知る藝である。今これを英雄直弼の中に見ることが出来る。偉大なるかな井伊直弼——。

毎日金亀城下に學びつつわれらの誇として英傑大老の事を久方振に思つて見た。浅い愚ではあるが

勿論名實共に小人が英雄を観察するのだから無理はないだらう。(島津)

赤 鬼

井伊直政は徳川の直臣「兵器皆赤を用ふ」とある。

長久手の役にも先鋒となり、關ヶ原の合戦にも先陣、鐵砲創二個でなほ進發といふ無敵の勇奮、敵の心膽を寒からしめた。家康は「天下の大戦に屢々先鋒の將となり勝利を得ること誠に開國の元勳なり」と賞め立てたものだ。俗に赤夜叉と恐れられた。

直政の第二子兵部小輔掃部頭直孝は乃父に劣らぬ剛の者。大防冬の陣に勇名あり更に大阪夏の陣には、木村重成の軍と兵を交へ、之を走らせ、その首を取った。

家譜によると「木村重成の軍、朝より午に至るまで苦戦數回にして倦み疲るるところ、直孝が新手にかけたてられ縦横に敗走す——重成も必死に奮戦す。庵原助左衛門重成、槍を合せて突き伏せしも重成また起上りて戦を挑まんとす。安藤長三郎傍よりこの敵吾に得させよとて首を取る」とある。今この首級は宗安寺に木村長門守重成首塚として残つてゐる。この戦の兩日直孝の手に獲るところの首すべて三百十五級に及ぶ。この日茶臼山の陣に於て家康に召されて厚賞をうけ「日本一番武邊」に褒せられた。後大老職となり徳幕府の柱石元勳であつた。その大阪の陣の奮戦に赤鬼の大將として敵を

懼伏せしめた。赤夜叉、赤鬼とは物具兵器すべて赤を以てした井伊家の傳統に因む武勳の綽名である。直政、直孝、この二代の武強、果敢、この精神が井伊直弼に傳はり、先陣ならずとも、時の尖端をきつて開國進取の礎を築いたのである。

赤鬼魂とは一死奉公、血に先んじて人の難しとする處を敢て進撃するの謂か。皇道精神の殉忠赤誠のそれと相通じる。彦中傳統のスピリット。(青山)

彦根人氣質

彦根精神とか彦根氣質とかいふものを書いてみたい。彦中精神を赤鬼だましといふ。關ヶ原の戦ひ、大阪の陣か知らぬ。井伊直政公か直孝公は知らぬ。とにかく彦根の城主井伊氏の祖先にその人ありとされたものが緋織の鎧に緋の兜、獅々奮迅の勢で奮闘、拔群の軍功あつたが故に赤鬼とこそ功名の綽名を勝ち獲たらしい。主君の馬前に一身を挺して敢戦躍するその意氣地を赤鬼魂として傳唱今日に及んだとは嬉しいことである。この赤鬼魂といふ奮闘的氣概とは別に又所謂直江商人氣質とは別に彦根人には彦根精神がある——又あるべきであると思ふ。

井伊家の祖は遠州の今川領にありながら地方の一族として今川氏の武力に屈せず殆んど獨立してゐるといふ。獨立心自持心の強い、實質剛健堅忍不拔の士風は甲斐源氏、三河武士の血をうけて彦根

の士魂となりやがて商魂になつてはゐないか、畧言せば意地ッ張り根性である。それと近江特有の喰下り主義の不撓不屈のねばり、信仰の地としての郷土愛着相互扶助、これらが渾然融和してそこ彦根人氣質があるじやないか。勿論武人的活潑、士族貧乏も一時はあつたてはあらうが、大部分については感情を高揚せないこと、萬事に華美でないこと、着實にコツ／＼とやつてよく苦しみに堪へて素志を貫くといふたちでもあらう。

そしてよく協力して郷土を守り得たのだ。今日の復興を見たのだ。まづいへば着實で賢明で間違のない人生の地道を辿る傾向人と押へられる。

本校の校訓の敬神崇祖、勤勉力行、實實剛健、和衷一心の四大條目は全く歴史的に無言のうちに彦根人の面だましひであつたといへる。

頼もしい哉彦根精神、現代乃將來へのこの精神の相薄を啓培を切に思はれる。

許六のこゝこ

彦根人物史をさぐれば先づ以て井伊直弼あり、大東義徹あり、西村捨藏あり近く弘世助太郎あり、なき、數へるまでもなく、彦根藩政期の人物の施政を慕ふ人物の網集は名僧名士名工と數限りもなからう。畫家も、刀匠も、書家も出た。すべて自然の數である。蕉門十哲の一、性剛骨の才敏なる俳人

森田許六も又彦根に孤々の聲をあげた御仁である。處は彦根町敷下の森川屋敷時は明暦二年八月十四日生れ、嵐蘭子をして『我が腹中を探り得た人は許子なり千藏の後も許子が如き人、世にあと思はず』と歎賞せしめた才物である。

許六といふ名か既にふるつてゐる。氏が六技に通ぜしが故に芭蕉が許六の名を下されたのだといふ曰く俳諧、畫、書、劍、鑓、馬術と他は知らず許六の繪を見たことがある。この人にこの技ありと一驚を喫した。俳道は所謂彦根風を成して湖東俳諧の首領、以て大津京阪の俳界と對立して遜色なかつた。

十圍子も小粒になりぬ秋の暮

いつか師に呈して賞を得た佳什である。

許六の繪は龍潭寺の襖繪に残つてゐる。即ち客殿の襖數十本が悉皆彼の手に成つたのだといふ。

劍は正法念流の兵法、未來記の奥儀を究め、鑓は横手物に利あり寶藏院の法印を襲ぐ、馬術は悪馬新當流の達者、書はその名筆たりしこと各務支考の吊許六の文には能者と知られる。

何はともあり稀に見る多藝多才、傳へるところによるこ、更に能樂に秀て彫刻に長し、茶道をよくし、人情に敦しとある。たゞ才子多病の例にあつて半生を病床に過し晩年宿痾に惱み正徳五年八月十六日六十歳を一期として逝つたとか。

一日長純寺境内の彼の墓を訪ねた、群小の墓石の間にゆつと尋ね當て得た『五老井無道菊阿居士』
ご墓銘にある。その横に許六の妻女らしい『凌雲院聖岳壽云々』ごあつたが、終りの文字は判然とせ
なかつた。俳人許六の墓としてはあまりにも淋しい。五老井とは彼が後年原村五老井に庵を結んだ縁
に因んで呼んだのだといふ。

彦根に於て、彦根の名士をこもすれば忘れ勝ちであり易いその一代表として俳人許六を録したもの
である。(目加田)

彦根ことば

彦根ご方言。——古代の彦根、近代の彦根と時代は移つても彦根言葉は今に遺る。特に苦老に於て
斷然彦根言葉なる點、顯著である。

『ほーけ、ほーかい。ほらほしや』の江州ことばの本場、今これを比較してみると

さうしてから——ほいてから

それでも——ほれでも

そしたら——ほいたら

あのそれ——あのほれ

そ　　こ——ほ　　こ

の類でもしれる。しつこい(執拗)をひつこい。しかる(吐)をひかる。しち(實)をひち、のそれは
江戸ツ子の反對にサ行音をハ行音にしてしまふ。

『ほやさかいおまはんはいかん』

『ほんな危険なことをおみ(御身)はなんでする』

あたりは未だ彦根ことばの本格とはいはぬ。

下さいを下しかれといふ。さうして下しかれ、まア上つて下しかれ。彦根の下しかれことばとはこ
れだ。

はい『諾』といふ返事を『な』といふハイ／＼が彦根の古老では『ナイ、ナイ』となる。『いや
だ』といふことをイランといふ。『氣の毒だ、可哀さうだ、辛いことだ』といふ言葉を『うい(憂い)
事で片附けてしまふ。

『まアういこと』『ういことなアし』となる。

『下さい』を『タイ』にさふ。

『御飯よさつてタイ』『林檎二つタイ』である。

『下さるか』が時に『頂戴るか』と來る。

『そないなこ言つて頂戴るさうちういワ』と来る。

駄目だこいふことをアカンと言つてしまふ。

『陸士の入學試験、体格であかんやろ』

『雨が降ると行つてもアカン』

『居なさる』を『居やはる』『御座る』『なさる』もやはり『上手に書きなハル』となる。

『伊吹へ行かへんか』『うち病氣で行けへん』でませんはへんに變る。

其の他『ごめんやす、お出てやす』のやす。『ほやさかいお前はいかんといふのだ』のさかいことばも上方と共通のものか。

古人曰く『言語は君子の樞機なり』ふるさとの訛なつかしいものなが、あまりにも標準語と隔絶した俗語卑語はさうしたものか『下しかれ』『な』『さい』『ういこと』『ちようだいる』は上品な方だか『いらん』『ほやさかい』『あかへん』はさなものか。

彦根名物

そもく名物とは何か『名物に旨いもの無し』とか『名物を食ふが無筆の旅日記』ミかにみると、名物とは食ふものなりミなつてしまふ。その土地の特有の産物であり且食ふものなり。となつて名産

より更に狭くなる。名物をその名の如く、有名なものひろげてしまふミ、名所も名産もゴツチャになる。さても彦根名物男なんてところはさう解決つけたものか。『出雲名物土産にやならぬ持つてお歸り安來節』ミなると物ミしては持つてかへれぬ聲——民謡——も名物の中に入るが、それならば彦根小唄の彦根シャンソンのとある。『伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ』ミもあれば彦根名物の第一が何ミいつても井伊の城山、金亀城ともなるじやないか。實際にお城があつて商工殷盛な現實の彦根に歴史と景観のいぶしをかけて彦根全體をグツと落ちつかせ、彦根の感興に一段のニューアンスを加へる。が併し常識ミしてそれは名物の部類に入らぬ。三百年の歴史は名物とするには餘りに大きい。

御城の序に、城山に今もあるお城の時鐘はたしかに特記すべき一種の彦根名物だらう。さしづめ他の都市ならもサイレン、古いところで午砲のドンミ來るとミを彦根は何と古代にクラツシツクな城山の鐘樓を守る老媪の時違はず、朝の五時から夜の十時までゴーン／＼と時間毎にその時数だけの點鐘で古往今來彦根の人々に懐しく呼びかけてゐる時の鐘である。二月の雪に埋もれた夜更にしかすがにけうとく聞くお城の鐘の何と深い情趣。

彦根壇、彦根で出来る佛壇を特に彦根壇といふ。京壇、濱壇に對する稱呼である。奈良朝時代からすでに彦根は信仰の土地であり、近世に入り藩主井伊家も特に佛信あつくそのためか彦根在來工産品